

平成 27 年度 (2015) 第二回 GBIF 日本ノード運営委員会議事録

国立科学博物館 細矢 剛

日時：平成 28 年 3 月 16 日 (水) 13:00-15:00

場所：国立科学博物館 上野本館 大会議室

参加者：松浦 (委員長)、大原 (副委員長)、伊藤、大澤、中山、細矢、三橋、矢後、山崎 (剛)、山崎 (由) の各委員

オブザーバー：

神保 宇嗣 国立科学博物館 動物研究部 陸上無脊椎動物研究グループ・研究員

高久 宏佑 環境省自然環境局生物多様性センター生態系監視科 主任技術専門員

土屋 守雄 環境省 自然環境局自然環境計画課生物多様性地球戦略企画室担当

戸津 久美子 国立環境研究所 生物・生態系環境研究センター・高度技能専門員

中江 雅典 国立科学博物館 動物研究部 脊椎動物研究グループ・研究員

福田 知子 東京大学総合文化研究科 特任研究員

渡辺 恭平 神奈川県立生命の星・地球博物館 学芸部・学芸員

欠席者：城石・藤倉・星の各委員 (委任状あり)、山野委員

報告事項

1. 国立科学博物館 (細矢)

- 1) ワークショップ 21 世紀の生物多様性研究 (通算第 10 回)「生物多様性情報をめぐる「文化」を考える」(2015 年 12 月 12 日、国立科学博物館日本館講堂)を開催した。
- 2) 第 26 回自然史標本発信研究会 (2016 年 1 月 25 日、兵庫県立 人と自然の博物館) で、西日本博物館ネットワークと共催で統計ソフト R についての技術講習会を行った。
- 3) サイエンスミュージアム・ネット (S-Net) の「自然史標本情報検索システム」の参加機関数・データ件数は、81 館 (大学 14 館、博物館 63 館、研究所 4 館)、約 408 万件となった (2016.3.9. 現在)。
- 4) 標本の全国コレクションデータ (動物・地学部門) は JBIF ポータルサイトに掲載し (<http://www.gbif.jp/v2/pdf/zenkoku20140613.pdf>)、植物部門は日本分類学会連合の HP に日本産重要コレクション調査 (植物) として暫定公開した。
- 5) 研究員・学芸員データベースは、502 名となった (2016.3.9.現在)。
- 6) 全国科学博物館協会の年次総会 (富山市科学博物館、2/25)、北海道自然史研究会 (北海道博物館、2/28)、分子生物学会 (12/1-3) における NBRP 展示にて S-Net/GBIF に関する普及活動を行った。S-Net のパンフレットを作成し、配布を開始した。
- 7) GBIF の要請に基づきデータ提供館に CC ライセンスの設定を依頼し、73 機関中 62 館から回答があった。うち、87%:CC BY, 13%: CC BY-NC を希望 (3/8 現在)。

2. 東京大学 (伊藤)

- 1) 生物多様性情報の国際標準化対応として GBIF Executive Committee (2015 年 10 月 6 日)、GBIF 第 22 回理事国会議 (10 月 8 日~9 日) に出席し、生物多様性情報の国際標準について

議論した。

- 2) 6th International Barcode of Life Conference (2015年8月18日～21日)に参加、ポスター発表を行った。
- 3) 日本産維管束植物のチェックリスト (GreenList) をライセンス CC0 にて公開予定。
- 4) 文献情報 (Esakia 5,205 件、近畿植物同好会会報 6,763 件) のデータ化、インベントリー調査データ (東京大学駒場キャンパスのカメムシ亜目 29 科 115 種) の GBIF 登録を行った。環境省・生物多様性センターの観察データの検証、南三陸ネイチャーセンター準備室 (MNC) 観察データの変換を行っている。
- 5) JBOLI WEB サイトの定期的な更新を行った。JBOL-DB のサーバーメンテナンスを行っている。

3. 国立遺伝学研究所 (山崎由)

- 1) サーバマシンおよびポータルサイトをチェック、監視中。
- 2) 国際 GBIF のニュースレターの和訳および e-book を継続公開
- 3) GBIF が提供する Web service API の一部についてチュートリアルを作成した。(公開準備中)。
- 4) GBIF への登録数はデータセット 31、データ 1,014,295 件となった(2016年3月現在)。
- 5) GBIF 日本ノードの検索サイト (東大・遺伝研分+科博 S-Net 分) の統合システムを構築する (S-Net 経由のデータは IPT 移行後に取得予定)。

4. ワーキンググループ

- 1) S-Net 広報・普及活動を行った。
- 2) 関連団体・プロジェクト (NORNAC, Annotathon, J-OBIS, iDigBio, Museomics) 等との交流を行っている。
- 3) ポータルサイト運営を継続、内容を追加・更新した。
- 4) IPT について、公開用サーバおよび公開用 IPT を準備した。公開前にデータを確認中。
- 5) アジア地域絶滅危惧種・侵略的外来種リストの統合作業を行っている。
- 6) BIFA(Biodiversity Information Fund for Asia, 環境省拠出金によるアジアにおける活動支援) につき、ベトナム関係者と協議した。

<質疑応答>

- 1) 環境省・生物多様性センターの観察情報の公開条件は？

すべて (いきものログもモニ 1000 も) CC-BY で公開予定。東大経由で遺伝研に出した 31 件も、提供館に確認後、すべて CC-BY にする予定である (伊藤)。

- 2) 文献情報のデータ化の方法は？

元のページを OCR をかけて情報を取り出す。植生調査の結果は植生調査票の内容から種情報を取り出し分布データにする。専門家がいるときは専門家が扱っている。

- 3) 南三陸のデータの公開は？

標本データは国立科学博物館、観察データは東大経由で GBIF に載せることになっているが、

担当者が代わってから話が中断している。データのやりとりについては、コミュニケーションが重要で、連絡ミス無くす必要がある。

4) 遺伝研の IPT サーバーのリプレースの状況は？

- ・ライセンスの問題が解決したら、ほぼ 1 日でリプレースできる（山崎由）。
- ・リプレースにあたっては、IPT のソフトに加えて、エクステンションも導入してほしい。エクステンションには、標準の DwC 形式に含まれない情報が入っており、これを含めることで情報が利用しやすくなる（大澤）。

審議事項

1. 国立科学博物館（細矢）

1) 研究会・ワークショップを開催する

- ・自然史標本情報の発信に関する研究会（6 月・2 月）
- ・分子生物学会 NBRP ブース（12 月）
- ・ワークショップ「21 世紀の生物多様性研究（通算第 11 回）」（12 月）

2) S-Net のデータ収集を継続し、現在までの課題を解析・整理する。

3) 研究員・学芸員データベースのリソース収集に努める。

4) 広報、データ提供への理解促進、新規コレクション獲得に努める。

2. 東京大学（伊藤）

1) 国内外の会議・シンポジウムへの出席により最新の国際標準の動向を調査し、最新情報システムの導入・普及に努める。

2) 種名チェックリストの作成を行う。

3) 生物分布情報（観察・観測データ）の収集・電子化を行う。

4) 種情報・DNA バーコード集積システムの構築のため、情報収集・公開、DNA バーコードの普及活動を行う。

3. 国立遺伝学研究所（山崎）

1) ポータルサイトの安定運用と利用促進に努める（GBIF チュートリアル作成、ニュースレター和訳）。

2) IPT2.3 への移行準備（ライセンス問題も含めて）、GBIF へのデータ登録・公開を進める。

3) 和名辞書を更新する。

4. ワーキンググループ（細矢）

1) GBIF ワークショップ・研究会を行う。

2) GBIF (S-Net) データ利用を推進し利用例を収集する。

3) GBIF アジア会合に参加する（2016.6.28-29、フィリピン）

4) S-Net/GBIF 説明会を行う。

5) BIFA 関連で生物多様性情報カリキュラム、ベトナム来日研修（2016.6.13-17.）などに対応す

る。

5. その他

1) 台湾での会合について（細矢）

→9月 5-9日に TaiBIF 主催の BIFA 関係の会合がある。日程は変わる可能性がある。台湾からは、その後 AP-BON 会合がある（9/13-14（暫定））と連絡がきている。

2) RDA（Research Data Alliance）の紹介（星委員欠席につき細矢より）

研究データ全般の統合を目指している。生物多様性データの統合もこの中に含まれ、3月初めに東京で会合が開催されたが、欧米主導でアジアの貢献は少ない。参加者は情報学専門家が中心。データ互換性を図る上では、テンプレートが決まらない、GBIF との関係調整などの課題がある。

3) 大学からの標本データ提供について（矢後委員より提案・説明）

大学の公共性や、研究指向である背景のため、データ変換手数料としての受け入れができないケースがある。そのような場合に、大学からデータの利用に関する知財権を外部に認めるための対価とするような契約がなされれば、データを提供できる可能性があることが指摘された。

4) 国立自然史博物館設立提言案の審査の進捗状況（松浦委員長）

提案書が学術会議の査読に進む見込み。提案書には、当委員会も提案者として名を連ねている。

<質疑応答>

1) 研究員・学芸員DBについて

- ・登録用フォーマットを送ってほしい（矢後）。
- ・青森は郷土史博物館、岐阜はデータ提供館に登録してもらえないのではないか？

2) S-Net/GBIF の博物館経由での広報について

- ・各館のデータについての展示パネルを実演と並行して展示できるような、展示キットを作成するのはどうか。博物館に巡回する方式にすればアウトリーチにつながるし、来館者にも博物館にある展示された標本以外のデータを知ってもらえる（大原）。
- ・GBIF の各国レポートのように、各館についてのデータが取り出せるようにするとよい。
- ・S-Net のユーザーインターフェースを改善して、API で、各館が自分の館のデータを引っ張ってこられるようにすべき（三橋）。
- ・展示パネル作成の場合、専門のデザイナーに依頼する方が効果的である。

3) S-Net/GBIF の一般への広報について

- ・S-Net の広報の対象として、データ提供者（博物館等）、データ利用者（研究者）、一般が考えられるが、データ利用者への広報が少ないのではないか？

→これまではデータを集める方に力を入れていたため、利用については後回しになっていた。今後、利用事例を集めて学会、シンポジウム、展示などでアピールしていく予定。そのために現在 S-Net データを分析中。GBIF にならって、欲しいデータをいかに簡単にダウンロードす

るか、などの利用法を紹介していく予定（細矢）。

4) データ利用を促進するための利用例について

- ・海外でも GBIF データの利用例があるが、もう少しわかりやすい例が欲しい。
- ・GBIF のサイエンスレポートは和訳をつくっているのので、引用できる。
- ・GBIF データを使ったトップジャーナルの例を紹介するとよい。

5) データの拡充について

- ・提供データは全国のコレクションをどれだけ反映しているか？
→ S-Net/GBIF データをコレクション調査の結果と比較すると、コレクション調査で回答のあった館とほぼ重なる。つまり、これらの回答館以外の館の開拓が課題であり、説明会などを通じて新規提供館を見つける必要がある（cf. 富山説明会での成果）（細矢）。
- ・まだデータの出ていない空白県がある。
- ・大学からのデータも少ない。大学博物館の一部からしか出ていない。
→ 前回の研究会「大学博物館からの情報発信」の後、大学から 2, 3 件問合せがあった。

6) データ形式の国際標準化対応について

- ・DwC 形式は変化している？
→ ver.2 以降、大きな変化はないが、Extension は変化している。最近では sample-based データが追加になったことが大きい。日本の sample-based データを出すことによって、日本から生態学的調査データが提供される意味は大きい（伊藤）。
- ・DwC 形式は TDWG, GBIF の会議で話し合った結果が、GBIF サイトに反映されている。

7) いきものログのデータ公開

- ・いきものログは DwC 形式なので、そのまま公開できないのか？
→ 日本語のため、英語に修正する必要がある。多様性センターで英語化している（高久）。
→ クリーニングに手間がかかる（伊藤）。

以上